

在日外国人求職者の 職業転換をテーマに 群馬大学と共同研究を実施

株式会社ボルテックスセイゲン
総務部

新井 規之氏



多文化共生国際シンポジウムでの研究発表



ドライバー不足解消へ向けて 共同研究で物流業界の活性化を

私の勤務する株式会社ボルテックスセイゲンは、群馬県安中市にある物流業で、トラックや倉庫などを扱っています。

日々働く、我が業界にも、少子高齢化は大きな問題になってきています。高齢者が増えて、若者が少なくなり、ものを運ぶ人自体が少なくなってきたということです。

この問題を何とか解決していこうということで、群馬大学と我が社で共同研究を行っています。これが私の今の多文化共生推進士としての活動です。

具体的には、外国人がトラック運転手になった場合にはどのような課題があるのかということや、貨物が安全に輸送できるのかなどをきちんと研究して、日本の政府などに、課題解決のための規制緩和を働きかけていこうというものです。

履修を通して学んだことは、群馬県と群馬大学が進めている地域再生計画に則った地域づくりの手法です。その課題解決の手法を活かして、在日外国人や留学生のみならずと一緒に地域の中を盛り上げて、活性化させていこうと考えています。

今後やっていきたいこととしては、自分の住んでいる地域などで、上述した職場における在日外国人労働者との異文化間の摩擦や衝突などを回避し、在日外国人と日本人のよさを互いに活かして、働きやすい環境や、住みやすい環境を作っていくことです。

職場でも留学生の受け入れを実践し 国際化を推進

私は、前橋市の中心商店街に住んでいます。その商店街の地域活動に留学生の参画を促したいと考えており、現在群馬大学が取り組んでいる留学生交流拠点整備事業の地域住民との橋渡しを、「多文化共生推進士」養成ユニット履修生や推進士の仲間達と一緒に行っています。だんだんと商店街側からも、留学生や群馬大学と協働するアイデアや依頼が、我々に届くようになってきました。これを賑わいづくりのひとつに繋げたいと思います。

職場では、多文化共生の視点を最大限に活用して、国際化の対応を現場で進めていきたいと考えています。2014年の春休みからは、ベトナム人留学生のインターンシップを、群馬大学との共同研究の一環で進めたいと思っています。大学の知恵と民間の現場力を併せる形で、群馬の内陸港の現場労働力の国際化を一步一步確実に進めて、物、情報だけでなく、ヒトにも開かれた群馬の物流業に繋げていければと考えています。



多文化共生推進士としてラジオ番組に出演



群馬県警察本部
生活安全部 生活安全企画課
国際対策主任
群馬県巡査部長

吉川 麻和氏



「結YUI」の活動の様子

安心して暮らせる群馬
信頼されて相談される
身近な存在になりたい

他機関の人とも連携して課題解決 積極的に人とつながることが大切

大学時代には本事業の企画・運営責任者である結城先生の元で学びました。県内は外国人が多く住む地域があり、多文化共生の必要性はずっと感じていました。警察官として最初に赴任した署で、外国人世帯を回る特別巡回連絡に同行したことがあり、「多文化共生推進士」養成ユニットは、その時の上司の勧めもあって受講しました。実際に受けてみると、多文化共生の視点や発想は防犯や犯罪抑止の面でも活用できると感じました。

3年間の履修を通じての一番の気付きは、自分から積極的に人とつながっていくことの大切さです。自分一人の力では対応できない課題でも、皆と協力することで解決する方法が見つかることがあります。それ以前は警察官という仕事の枠にとらわれた発想しかできなかったように思いますが、履修を通じて、他機関の人とも連携してうまく解決に導く方法を見つけるノウハウを学べました。また、ネットワークとして活かせる人脈ができたことは、仕事をするうえでも大変役に立っています。

コンサルタント・コース履修時は、生活安全課で少年係をしていたこともあり、外国人学校の生徒を対象に防犯活動の啓蒙や交通ルールの指導を行いました。思った以上に自転車防犯登録の制度について認知度が低いことに驚きました。自分の自転車のどこに防犯登録番号が付いているかも知らない子どもが多く、「なぜお金を払って登録する必要があるの?」という質問も。交通ルールの理解はできていても、実践できているか検証する必要があると気がきました。

安心できる防犯対策をアドバイス 外国の方にも警察を身近な存在に

多文化共生推進士となり、現在は県警本部で国際対策を担当すると同時に、留学生安全安心ボランティアサークル「結YUI」の活動をサポートしています。日本で安全に暮らしてもらうためには「気を付けて」と言うだけでは不十分です。5月に行われた「結YUI」の総会で、警察の取り組みを具体的に紹介したり、「多文化共生推進士」養成ユニット履修生と一緒に防犯診断をするなど、「犯罪にあわないために、どのようなことに気を付ければ良いのか」をテーマに学んでいただきました。防犯意識には国によって差があります。その違いを見つめる狙いもありましたし、何より日本での防犯の仕方をきちんと理解してもらうことが大切だと思います。実際、日本は安全という印象が強いせいか「玄関のカギは掛けていない」という留学生もいました。女性の一人暮らしなら、洗濯物を干す時に男性物を一緒にする、下着は部屋の中に干すといった具体的な防犯対策についてもアドバイスしました。すると「ちょっと気が緩んでいたかもしれない」といった声が挙がってきました。

第一に、外国の方に警察に身近なイメージを持ってもらうことが大切です。そのために自分から積極的につながりを求め、信頼され、相談してもらえる関係を築きたいと思います。そして地域の人と課題を見つけていながら、多文化共生推進士として「警察は、あなたたちの味方なんですよ」と伝えていきたいです。



多文化共生推進士としてラジオ番組に出演

「つなぐ」存在として 多文化共生を進める 人と人との関係づくり

高崎市役所
都市整備部 市街地整備課
管理担当

鷺谷 亨信氏



「多文化共生推進士」養成ユニットの
基礎教育で講義を行った



県内外の多数の事例を見ることで 多文化共生の現状と実態を理解

以前から姉妹友好都市交流や国際交流に関心があり、2007年に希望する国際交流担当の部署に異動することができました。部署の仕事は姉妹友好都市交流が主流でしたが、ここ数年は、国際交流と多文化共生が主な取り組みとなっています。「地域に暮らす外国の方とどのようにして共に生きていくか」が大きなテーマです。私が「多文化共生」の言葉を知ったのもこの時です。その後、2008年に多文化共生シンポジウムに参加する機会があり、「多文化共生推進士」養成ユニットのことを知って、履修を希望しました。

多文化共生について学ぶ機会は、自治体国際化協会（CLAIR）が認定する多文化共生マネージャーのコースや、多文化共生社会対応コース、全国市町村国際文化研修所（JIAM）主催の研修などでもありましたが、この「多文化共生推進士」養成ユニットは3年間という長期の講座です。正直なところ、通うのは大変でしたが、結城先生のコーディネートで県内外の事例を多数学ぶことができたのは、多文化共生の現状、実態を知るうえで大変参考になりました。

高崎市は姉妹都市交流が活発で、5都市と友好交流しています。その直接の担当者として会議の準備をしたり、国際交流協会の事務局の運営を任せられることもありました。国際交流イベントを開催する場合には、あらかじめ人との関係を築いてから、ボランティアの方や関係部局の方とプロジェクトを進めていく必要があります。「多文化共生推進士」養成ユニットは、日常の業務で実践してきたプロセスを学術的な視点から再確認できる貴重な場でした。

多文化共生推進士としてイベント参加 活動の場が増えていくことを期待

現在は異動により、都市整備の予算の管理や補助金の申請が主な業務ですが、アナリスト・コースでの分析、プランナー・コースでの企画立案、そして実際にいろいろな方の協力を得ながらプロジェクトを実現させていくコンサルタント・コースでのプロセスは、どのような事例においても活用できると感じています。実際に現在の業務においても、都市再生、社会資本整備の効果検証は欠かせません。手順を踏んで調査、分析、計画、実行、検証を繰り返す仕組みを学べたことは大いに役立っています。

先日群馬県よりお声掛けをいただき、大泉町で開催された多文化共生の防災訓練に、多文化共生推進士として参加させていただきました。これからも様々なイベントに協力できる機会があると思いますし、県にはそのような活動の場を多く設けてもらえると嬉しいです。

多文化共生推進士とは、「人と人を線でつなぐ」存在だと感じています。革新的な素晴らしいシステムを生み出すことが目的ではなく、多文化共生を進める人と人との関係づくりこそ、もっとも重要なポイントなのです。県から認定証をいただきましたが、まだまだこれから。今後の取り組みを通じて、「人と人をつなぐ」役割を果たすことで、本当の意味での多文化共生推進士に近づいていく気がします。



人と人をつなぐ多文化共生推進士

実利に結び付く発想で 民間企業との コラボレーションを

株式会社総合PR
第三営業部 サブリーダー
アカウントプランナー

須藤 博樹氏



「多文化共生推進士」養成ユニットの
基礎教育で講義を行った

相互理解には余計な概念を壊して あえて思考を真っ白にして考える

地域活性化に多文化共生という要素を加えた時にどのようなことができるか。第1期の履修生ということもあり、その答えを探していきながら進んでいったように感じます。

多文化共生の可能性を模索する中で、もっとも大切だと感じたのは、既成の概念を捨てること。国籍を問わず、余計な概念を取り払って話をしないと、間違った方向に進んでしまうことがある。日本語での会話が成り立ち、向き合ってきたと話をしているようでも認識の差は生まれるものだと感じました。それが理解できた後は、まず既成の概念を壊す作業から始めることにしました。対峙している人の考えを理解して学んでいく。日本人同士でも、同じようなことがあります。相手が外国の方だと、なおさらその傾向が強いはず。ですから人それぞれのことをきちんと理解しようとする場合には「当たり前」の意識を外して考えないといけません。思考をあえて真っ白にすることで、深いコミュニケーションが可能になることを知りました。



みなかみ町での交流



ブラジルフェスティバルinぐんまでの活動

子どもが自然と仲良くなるような 心の垣根を取り払う状況をつくる

コンサルタント・コース履修時には、みなかみ班として、猿ヶ京温泉で語り継がれる民話「てじろのさる」を取り上げて、多言語での民話の語り、子守唄、そして食の交流を行いました。なかでも子守唄は、どの国のものも優しく、温かい気持ちになれるという共通点がありました。昔聞いた子守唄をステージで再現していると、子どもの頃の自分とシンクロするような感覚が湧き、その後は垣根を外したコミュニケーションができました。お互いの国の昔遊びを紹介して、実際にやってみたのも童心に返ることができて楽しかったです。構えた礼儀正しさなどよりも、子ども同士が自然と仲良くなれるような状況を作るほうが、お互いの理解はより深められるのではないかと感じました。

新しいビジネスを生み出すヒントを探したいと考えて「多文化共生推進士」養成ユニットに参加して4年。まだ実利を生み出すものはありませんが、社内で抱える課題の解決などについて、コミュニケーションの力が活かされていると感じます。

多文化共生の視点から、例えば観光誘客の動線を確保する看板やスポット案内できるスマホアプリなど、学んで身に付けたノウハウを活かせるアイデアはたくさん湧いてきます。今後は多文化共生推進士というキャリアの独自性や強みをもっと打ち出せるようにしていきたいです。そのためには教育機関や行政、ボランティアだけではなく、民間企業とのコラボレーションが必要となってきます。実利に結び付けられる発想をすることで、多文化共生の深まりをより加速させていきたいですね。

「つなぐ」存在として 多文化共生を進める 人と人との関係づくり

群馬県企画部 国際戦略課
戦略推進係
主事

中澤 麻紀氏



職場での様子
(写真右)群馬県企画部 国際戦略課長



留学生も多文化共生の担い手だと 理解できるコミュニケーションを

大学時代にも海外ボランティアの経験があり、外国の方と接する機会が多かったため、社会人になっても学生時代と同じように外国の方と関われる機会が欲しいと思っていました。実際に履修してみると、最初は座学が多いように感じましたが、3年目のコンサルタント・コースでは自分たちの課題研究を企画から任せられたので、仕事とのバランスを取ることが少し大変でした。私たちが手掛けたのは、県内の大学や専門学校に在籍する留学生たちが「群馬で働き、暮らす」ための地域協働プロジェクト。一緒に取り組んだ同期の皆さんが個性的で大きな刺激になりましたし、随分と助けていただきました。

留学生との窓口役を担当し、連絡を取り合いましたが、特に気をつかったのはモチベーションを保ち、積極的な参加意識を持ってもらうことです。「自分たちも多文化共生に取り組んでいるんだ」という当事者意識を持ってもらうコミュニケーションを心掛けました。そのためには、まずは自分が情熱を持って、思いを伝え、理解してもらうことが必要でした。



多文化共生推進士としてラジオ番組に協力

お互いの中にある壁を取り払って 日本人と外国人の理解の架け橋に

最終的には、留学生の視点で、感じることを素直に、正直に記事にしてもらった冊子をまとめました。もう少し先まで踏み込んだ取り組みもできたのではないかと反省もありますが、こうした取り組みが次の事業につながっているのだと思います。また現在の履修生が取り組んでいるラジオ番組「ハタラクラスぐんま」に県の職員が出演するコーディネートもしています。

カンボジアの孤児院を運営する県内の団体でのボランティア活動が続けられていますので、現地のことを県内の人にもっと知ってもらったり、お互いが触れ合う機会をつくったり、今後も積極的に関わっていきたいと考えています。

身近な地域の課題としても、日本人と外国人のお互いの関わりが薄いといった現実がいまだにあります。もっと機会が必要ですし、「外国の人って、良い人が多いな」と思ってもらえるようにしたい。それが第1段階ですから、まずはお互いの中にある壁をどんどん取り払っていききたい。そうした中で私が多文化共生推進士として、理解をつなぐ架け橋になれば嬉しいです。



カンボジアでの活動の様子

